

# 桑原浩二の国語科（第3・4学年複式）研究計画

## 1 本研究で目指す子ども

国語科「書くこと」の学習において、**文章化過程の往還を通して、自分の考えを明確に書き表す子ども**を目指す。文章化過程の往還とは、学習指導要領における「書くこと」の指導事項に示されている「題材の設定、情報の収集、内容の検討」「構成の検討」「考えの形成、記述」「推敲」「共有」といった学習過程を行きつ戻りつすることである。また、自分の考えを明確に書き表すとは、自分の考えとそれを支える理由や事例とを整理して記述することである。文章化過程の往還には、次の二点の価値がある。一点目は、資質・能力を発揮する機会を増やし、文章を質的に向上させられる価値である。二点目は、単元早々から文章全体を俯瞰できるため、構成や内容の不備を自ら見いだせる価値である。

従来の「書くこと」の学習でも、自分の考えを明確に書き表させようと、文章化過程に沿って表現させてきた。しかし、記述前の情報の収集や構成の検討といった過程で早くも意欲が低下し、その結果、自分の考えが曖昧なまま文章を簡単に書き終わらせてしまう子どもの姿があった。特に、書くことへ抵抗感を示す子どもは、完成された文章を常に書かなければいけないと思い込んでいるのである。

このことの原因は、文章化過程の各過程を重点的かつ一方向的に展開する指導で留まっていることにある。書くことに抵抗感を示す子どもでもよりよく書き表せるようにと、各過程をじっくり指導し、構成の次は必ず記述、記述の次は必ず推敲と、単線ルールの上に子どもを乗せて進める指導である。

さらに、このような書き方は、大人の記述とは異なる。大人は、一度文章を記述した後にも、不足の情報を補う再取材を行ったり、構成を変える再構成を行ったりして、文章を練り上げる。つまり、文章化過程を往還するからこそ、自分の考えを徐々に明確にして書き表せるのである。また、学習指導要領解説国語編には、「ここに示す学習過程は指導の順序性を示すものではないため、アからカまでの指導事項を必ずしも順番に指導する必要はない」と示された。これは、本研究と重なる点である。

私は、下掲の言葉による「見方・考え方」を働かせて、子どもが主体的に文章をよりよく練り上げていく学習に改善する。そこで、具体的に、次の二点の改善策を講じる。

一点目は、単元の冒頭から、文章を共有する場を設定する。従来の「書くこと」の学習において、文章を共有することは、単元の終末が主であった。そのため、子どもは、自分の文章の不備に気付いても、よりよく書き直すまでには至らなかった。そこで、単元の冒頭で友達と文章を共有することで、子どもは、「自分の考えが相手によく伝わる文章か」などと、言葉の使い方に着目した問いをもつ。

二点目は、タブレット端末を活用する。収集した情報と記述した文章とをタブレット端末に入力しておくことで、文章構成の検討を始め、文章の加除修正などが容易にできる。そのため、子どもは、文章化過程を往還しやすくなる。

このような改善を図ることで、目指す姿を具現する。

## 2 本研究で育成する資質・能力、そのために子どもが働かせる「見方・考え方」

「見方・考え方」		
○言葉の使い方に着目し、相手、目的と書く言葉とを関係付けて考えること (以下、言葉による「見方・考え方」とする)		
①知識・技能	②思考力・判断力・表現力	③態度
○言葉の特徴や使い方に関する知識・技能	○書くことを選び、材料を集め、伝えたいことを明確にする力 ○文章を構成する力 ○書き表し方を工夫する力	○思いや考えを伝え合おうとする態度

## 3 主張する働き掛け

子どもは、これまでの単元において、上掲の資質・能力を発揮して課題解決をしている。しかし、発揮した資質・能力を十分に自覚しておらず、また、資質・能力の定着までには至っていない。

まず、単元の導入として、「自分の考えを書いて伝えよう」と言語活動を提示する。その後、自分の考えをもたせやすくするために、取材期間を設定する。次に、取材で収集した書く材料をどのように活用するかを問う。子どもは、これまでの学習経験からタブレット端末を活用して、文章の構成を考える。そして、初稿を記述させる。子どもは、タブレット端末を使い、初稿を記述する。しかし、初稿は、自分の考えとそれを支える理由や事例とが整理されておらず、内容的にも乏しい(C0)。

### 働き掛け1

**初稿を読み合う場を設定し、相手・目的と文章とが合致しているかを問う。**

言葉の使い方に着目した問いをもたせるための働き掛けである。

まず、初稿を読み合う場を設定する。自分の初稿と友達の初稿とを比較させるためである。子どもは、学級全員の初稿を読む。次に、相手・目的と文章とが合致しているかを問う。これは、**言葉による「見方・考え方」**を引き出すためである。子どもは、初稿の比較から得た気づきがあるため、自分の文章を問われることで疑問を感じ、相手・目的と文章とが関係付き始める。そして、「どのように書けばよいか」と**言葉による「見方・考え方」**を働かせ始め、「書き直したい」と問いをもつ。その

後、発言をまとめ「相手・目的に合う文章とするためにどのように書くか」と、学習課題を設定する。

#### 働き掛け2

**代表的な文章と相手の状況が分かる資料とを提示し、どこを直せば読み手に伝わるのかを問うた後、これからしていきたいことを問う。**

課題解決の見通しをもたせるための働き掛けである。

学習課題を設定した後、代表的な文章と相手の状況が分かる資料とを提示する。相手の状況に応じた文章の構成や内容をつかませるためである。子どもは、資料から相手がどのような状況にあるのかをとらえ、どのような文章を書き表せばよいかと考え始める。ここで、代表的な文章のどこを直せば相手に伝わるのかを問う。これは、再取材及び再構成を促すためである。子どもは、文章における言葉の使い方に着目し、内容の過不足や構成の変更を指摘するなど、全体で協議する。そして、文章に再取材及び再構成を施せばよいと気付く。このような子どもに、これからしていきたいことを問う。これは、**言葉による「見方・考え方」**を明確化するためである。子どもは、**言葉による「見方・考え方」**を明確にし、思いや考えを伝え合おうとする態度（③態度）を発揮して、必要な情報を補い、整理して構成し直せばよいと課題解決の見通しをもつ。どの情報をどのように活用すれば課題解決できるのかと焦点付くため、相手・目的と文章とが関係付き、**言葉による「見方・考え方」**が明確になる。

#### 働き掛け3

**再取材を行う場を設定し、第二稿の見出しの順序と判断した理由とを問う。**

自分の文章に必要な情報を収集・整理させ、第二稿を記述させるための働き掛けである。

課題解決の見通しをもった子どもに、再取材を行う場を設定する。自分の文章に必要な情報を収集させるためである。子どもは、様々な方法で、必要な情報を収集する。このような再取材を行った子どもに、第二稿の見出しの順序と判断した理由とを問う。収集した情報を整理させ、第二稿の構成を考える際の手掛かりをつかませるためである。子どもは、言葉の特徴や使い方に関する知識・技能（①知識・技能）を発揮して、第二稿の構成を複数考え出す。その後、タブレット端末を使い、付箋紙を動かして、文章の構成を確認する（**ツール活用能力**）。このような子どもに、Wordで第二稿を記述する場を設定する。すると、子どもは、タブレット端末を活用し、初稿を練り上げ、第二稿を記述する。

#### 働き掛け4

**第二稿を検討する場を二段階で設定し、最終的にどのような文章にするかを問う。**

自分の考えとそれを支える理由や事例とを整理して記述させるための働き掛けである。

第二稿を記述できた子どもに、第二稿を二段階で検討する場を設定する。相手・目的と文章とが合致しているかを吟味させるためである。子どもは、第二稿を友達に説明する。説明を聞いた友達は、相手・目的と文章とが合致しているかという視点で助言する（**協働性**）。第二稿を検討した子どもに、最終的にどのような文章にするかを問う。最終的な判断を促すためである。子どもは、友達の助言を基に、書き表し方を工夫する力（②思考力・判断力・表現力）を発揮して、最終的な文章を書き表す。このようにして、**文章化過程の往還を通して、自分の考えを明確に書き表す子ども（Cn）**となる。

#### 働き掛け5

**観点を提示して学習を振り返る場を設定する。**

発揮した様々な資質・能力の自覚を促すための働き掛けである。

最終的な文章を書き表した子どもに、「これまでの学習で、できるようになったことや分かったこと」という二つの観点を提示して、学習を振り返る場を設定する。子どもは、学習過程を振り返り、発揮した様々な資質・能力を自覚する。その後、子どもは、文章を整え、文章を完成させる。単元のゴールとして、文章を交流する場を設定する。子どもは、互いの文章を読み、よいところを伝え合う。

## 4 検証

### (1) 検証すること

- ① 構想した働き掛けにより、想定したCnになったか。
- ② 構想した働き掛けにより、想定した「見方・考え方」を働かせることができたか。
- ③ 構想した働き掛けにより、想定した資質・能力を発揮することができたか。
- ④ 構想した働き掛けにより、想定した資質・能力を自覚することができたか。

### (2) 検証の方法

- ① 働き掛け4を受けて、文章化過程の往還を通して、自分の考えを明確に書き表せたかどうかを、子どもの発言、ツール、ワークシートの記述、最終的な文章から検証する。
- ② 働き掛け1・2を受けて、想定した言葉による「見方・考え方」を働かせていたかどうかを、子どもの発言、同意の挙手、ワークシートの記述から検証する。
- ③ 働き掛け2・3・4を受けて、想定した資質・能力を発揮していたかどうかを、子どもの発言、ツール、ワークシートの記述、最終的な文章から検証する。
- ④ 働き掛け5を受けて、想定した資質・能力を自覚していたかどうかを、子どもの発言、ワークシートの記述から検証する。

## 5 年間の授業計画

- (1) 指定研究授業 (7月)「調べて伝えよう～みんなの花火、募金してから見るか?～」(9時間)
- (2) 附属オータム研修会 (9月)「調べて伝えよう～附属特別支援学校の友達、君の名は。～」(8時間)
- (3) 初等教育研究会 (2月)「調べて伝えよう～万葉中三、祭りやるってよ～」(8時間)